

「ハイジの国」でようやく 「ハイジのオペラ」が誕生

世界一有名なスイス人キャラクターのハイジが、いままでオペラにならなかったのが不思議なくらいだが、ティム・クローン台本

ファビアン・ミュラー作曲の

《ハイジがクリスマスを祝う》

(Heidi feiert Weihnachten,

Heidi feiert Noël) が12月1日、

ビール市立歌劇場(ベルン州)

で世界初演された。この劇場

は、日本では阪哲朗が第2カペ

ルマイスターを務めていた劇場

として知られているだろうか。

ミュラーの音楽は「子供用」で

はなく、大人も子供も想像力を

かきたてられる表現力に長けて

いる。アンナ・ドレッツァーの

演出も、布袋を羊に見立てるな

ど、簡単な小道具で効果を最大

に盛り上げる技が光る。題名役

のチェルシー・マリリン・ツ

ルフリーはチューリヒ歌劇場

で脇役を歌っても光る若手だ

が、少女になりきって、柔らか

い声でハイジを演じる。おじい

さん役のロベルト・コラーも一

本足の腰掛けを装着され、効果

的に老人を表現し、歌う。レミ・ブルネ

ンス演じるペーターは芝居にメリハリを与

えていた。声楽的にもレヴェルが高い彼ら

3人に対し、おばあさん役のスザンナ・

ハーバーフェルドは声が通らなかったが、

この役には支障をきたさなかった。児童合

唱団の力も大きく、ドラマティックなシー

ンもファンタジックだ。セリフの部分が聴



ようやくオペラとなった、ビール市立歌劇場の《ハイジがクリスマスを祝う》から

©Konstantin Nazlamov

き取りにくいのが難だが、演出を妥協して舞台の前のほうで話すか、カスパール・ツェンターの指揮で、もう少しオーケストラの音量を抑えるとかする必要はあるが、まずは、すばらしいオペラの誕生を祝いたい。

チューリヒ歌劇場が 《プラテ》新演出

チューリヒ歌劇場では12月10日、ラモー

《プラテ》の新演出がプレミエを迎えた。

古楽アンサンブル、ラ・シンティツラ管弦

楽団を指揮するのがエマニュエル・アイム

ということと期待はしていたが、予想以上

の求心力でラモーの音楽を引っ張っていた。

イエツケ・ミーンセンの演出はバレエ学校を舞台に展開、ダンサーも駆使して飽きさせないシーンを描き出した。そのバレリーナの一人が、いきなり豊かな声で歌い出したときは驚いたが、タリー役のアンナ・エルカー・シャムだった。ラ・フォーリー役のメアリー・ビーヴァンもバレエ教師の設定とはいえ、超絶技巧を歌いながら男性ダンサーに持ち上げられるのはすごい。病気を押してサテュロスとシテロンを歌ったレナート・ドルチーニ以外は粒ぞろいな歌手陣のなかで、題名役のマティアス・ヴィダルはいちばん光っていた。

さかのぼって12月7日にはサイモン・キンリーサイドのチューリヒ歌劇場でのリサイタルを聴いた。上半身裸のドン・ジョヴァンニをスマートにこなしてからはや17年、最近声が乱れる彼のソロに少々不安を感じながら客席に着くと、やはり空席が目立った。歌い始めると何度が痰が声に絡んだが、「本調子じゃないけど、そんなの問題じゃない」と余裕のコメントを発して聴衆を安心させる。それ以外は豊かな美声が胸部で心地よく共鳴する。手などがひっそりなしにむだな動きをして、落ち着かないのが難だが、シューマン《堅琴弾きのパレード》、シューベルト《歌曲集「白鳥の歌」》から《愛の使い》、《セレナード》、《都会》、《孤独な男》、《秋の夜の月に寄せて》を経て、ヴォルフ《メーリケ歌曲集》から《散歩》、《考》、《おもひよ、おおもひよ、眠るみどり子イエス》、《クリスマスローズに》、《このとり》の使いでは、息の完璧な長いコントロールが光った。鼻から軽く息を吸っただけで、長いフレーズを無理なく歌い終える技は歳を感じさせない。プラームス《夜うぐいすは

羽ばたく》、《落胆》、《荒野を越えて》、《おお涼しい森よ》、《夢遊病の人》、《すべての花が》のあとはフランスものに移り、ドビュッシー《春が来た》、フォーレ《ひそやかに》、《蝶と花》、そしてラヴェル《博物誌》でプロگرامを終えた。アンコールはドイツものに戻って、リラックスしたように客席を沸かせた。そして、聴きにきていたブリン・ターフェルに合図をしながら舞台袖に消えていった。

トーンハレがジャズクラブに?

12月13〜15日のチューリヒ・トーンハレは、高級なジャズクラブに変身したようだった。

14日には小ホールのプレ・コンサートで、現在チューリヒ芸術大学修士課程で学んでいる住村奈緒がエルヴィン・シュルホフ《6つのジャズのスケッチ》でピアノ・ソロを、続いて同時代のサクソフォーンを吹いたサンドロ・コンパニオンと「アルト・サクソフォーンとピアノのための《ホット・ソナタ》」を披露して、ジャジーなスタートを切った。続く本公演ではバーク・ヴォー・ヤルヴィ率いるチューリヒ・トーンハレ管弦楽団が、ブライス・デスナー「オーケストラのための《マリ》」で自由な曲想と美しくそろった弱音を聴かせたあと、ウェイン・マーシャルを招いてガーシュウィン《ピアノ協奏曲へ調》で遊び心のある共演を聴かせ、第1楽章のあとではブラヴォーが飛んだ。最後は巨大なライヴハウスのように客席全体が沸いていた。

休憩後はマーシャルが《きよしこの夜》をまず聴衆に歌わせ、オルガンで即興演奏を披露した。最後はラフマニノフ《交響的舞曲》だったが、プログラム内容の濃さに、頭が飽和状態になった。